



朝の余韻も薄れ始めた午前の中刻。
アズキは、婦人警官の制服を着て署前の壇上に立った。
多くの警察官が見守る中、あらかじめ用意してきた挨拶を告げる。

「みなさん、こんにちは。今日一日、警察署長を任命されましたアズキです。こうして警察官の服に袖を通すのはもちろん初めてなので、正直ステージに立つときよりも緊張していますが、このプレッシャーに負けないよう精一杯頑張ろうと思います」

アズキが頭を下げると、整列した署員達が一斉に拍手と歓声を送った。通常、一日署長に就任したからといってここまで喝采を浴びることはない。ゆえにこれは、アズキの人氣がもたらす効果と言えよう。公僕といえど人の子だ。今をときめく美少女アイドルを前に、ついはいでしまうのも無理ないことだった。

そんな熱烈な視線を四方八方から浴びて、アズキはこう思った。

(うう……駄目だ、これ……う、うずうずしちゃう……)



アズキは壇上でもじもじと太腿を擦り合わせた。
実を言うと彼女は今、大いに欲求不満なのだ。

世間じゃ清楚アイドルなんて言われているアズキだが、実際のところは中学生男子も顔負けの性欲モンスターなのである。毎日の自慰行為は当たり前。日によっては二回三回——いやいや四回五回とすることもある。極太パイプを使ったえっぐいオナニーだって大好きだ。

しかしここ数日、仕事を立て込んでまんこをいじる暇もなかった。こんな状態で一日署長なんて務まるのか、我ながら疑問だった。とはいえ始まってしまったからにはやり遂げるしかない。

(よし……やるぞっ)

アズキは何人かの警官を伴い、商店街のパトロールに出かけた。パトロールといっても実際にするのはいわゆる見守り活動だ。店先を巡って挨拶をしながら、戸締まり用心や特殊詐欺注意のチラシを貼らせてもらう。アズキの美貌と柔らかな物腰が功を奏して住民らは老若男女を問わず快く受け取ってくれた。

最後に尋ねるのはこの八百屋だ。

「こんにちは、お時間いいですか？」

「おお、なんだい？」

出てきたのはいかにもスケベそうなハゲ親父だった。親父は伸びに伸びた鼻の下を隠そうともせず、

「ほお、一日署長？ そりや堪らんね。一日と言わず一生いて欲しいもんだ。あんたみたいな別嬪さんが一言叱りや、どんな野郎も言うことを聞くだろう。ぐふふ……それにしてもエロい身体しとるねえ。本職はAV女優か何かかい？」

「い、いえ。わたしはアイドルをしています」

「なるほど。道理で可愛いわけだ……っと、いかん手が滑った」

「きやあっ！」

白々しいことを言いながら、アズキの尻を触る親父。

「も、もう！ 駄目じゃないですか！ 逮捕しちゃいますよ？」

「うひょー、ええのうええのう。是非逮捕しておくれい」



人間、歳を取ると怖いものがなくなるのか、本物の警察官もいるというのに並外れた度胸だ。その目に余るセクハラを本職達が口酸っぱく注意していると、彼らの無線がザザッと鳴った。

どうやら事件のようだ。
付近の警官は急行するようにと、無線越しにアズキにも聞こえた。

「アズキさん！ すみませんが、署に戻るのはお一人でお願いします！」

そう言い残し、警官達は事件現場へと駆け出した。

まさか一日署長の活動中に緊急事態が発生するとは——予想外の出来事にアズキはしばらく呆けていた。すると邪魔者がいなくなったのをいいことに、親父がまたアズキの尻を触る。アズキは再び怒るが、親父は「いいじゃないか減るもんじゃない」と悪びれもしない。

アズキとしては溜まったものじゃなかった。

こんないやらしい触り方をされては、必死に抑えつけている性欲が溢れ出してしまふ。

店内には立派に育ったぶつといナスや大根がずらっと並んでいて、アズキはぐくりとつばを飲む。あんな逞しいモノでおまんこを掻き回されたらどれだけ気持ちいいか——迂闊にも想像を膨らまし、股間を濡らしてしまった。いけない。

このままここにおいては「清楚なアイドル」を保てなくなる。

アズキは心惜しそうな顔をする親父と別れ、一人で警察署へと戻った。

「ここを通れば近道になるかな……」

アズキは狭い路地へと入り込んだ。

土地勘のない地域ではあるが、地理に詳しいアズキは近道のパターンというものを理解していた。実際、この道は地元民だけが知る警察署までショートカットコースだった。

今日の仕事が終わればようやく時間ができる。

家に帰ったら思いっきりオナニーをしよう。

それまで我慢、我慢——

そんなことを思いながら歩いていると、物陰から不意に男が現れた。お互いに避ける暇などなかった。

「あいたたた……す、すみませ」

男はそこで言葉を途切れさせ、ぎよっと目を見開いた。

彼はアズキに押し倒し、ラブコメの主人公よろしく両手で胸を触っていたのだ。片膝をアズキの股に膝を入れ、ぐりぐりとアソコを刺激するのも忘れない。完璧なラッキースケベだった。

この瞬間——とうとうアズキの「スイッチ」が入った。

男は慌てて飛び退る。

「ちちちち違うんです婦警さん！ わざとじゃなくて！」

ゆっくりと立ち上がったアズキは妖艶な眼差しで男を見上げた。

「わざとじゃない……本当ですかあ？」

たおやかな指先が男の胸板をなぞる。

「この辺って最近、痴漢の通報が多いんですね……それって、お兄さんのせいなんじゃないんですか？」
「そ、そんな、痴漢だなんて！ 本当に偶然なんですよ！」
「ふうん、そうですか……じゃ、確かめさせてくれますか？」

アズキはピアノの鍵盤を操るかのような手つきで男の身体を弄り始めた。



「ちょ……な、何を」
「持ち物検査ですよ……ほら、じっとしてください。それとも、何か見られたら困るものでも持ってるんですか？ 盗撮写真の詰まったスマホとか、どこから盗んできたパンティとか？」

男は首をぶんぶんと横に振った。

アズキは男のボディチェックを続けた。

わざとおっぱいを押し当てると、男はびくっと震えて顔を赤らめた。その反応はアズキの嗜虐心をそそるものだった。どんどんと身体が熱くなっていく。もう我慢の限界だ。アズキの指先は宝物を求めるように男の股ぐらへと伸びた。

その膨らみを手の平で擦りながら、

「あれえ？ これはなんですか？ 何か硬いものを隠しているようですけど」

「そ、それは……うぐっ！」

「もしかしたら危険物を隠し持ってるのかも……これは確認の必要がありますね♥」

「ああっそんな！」

アズキがファスナーを下ろすと、隆起した肉棒がぼるんっと飛び出してきた。

アズキは男のちんぽをシコシコと扱きながら、

「まあ、町中でこんな大きくさせてるなんて……やっぱり不審者だったんですね♥ このおちんぽで女の人を何人もレイプしてきたんでしょう♥ 酷い人、許せません♥」

「ご、誤解ですう……っ」

「あくまで無実を主張するんですか？」

「あ、当たり前じゃないですか。だって、何も怪しいものなんて持ってなかったでしょう？ 確かに勃起はしてしまいましたが、そ、それは婦警さんが刺激したせいで……」

「そうですか……わかりました。じゃあ、ボディチェックを続けます」

「続けるって、もう身体中調べたでしょう？」

「いいえ、まだですよ……まだ♥」

アズキはその場に跪くと、男の包茎ちんぽにふうっと息を吹きかけた。

「この余ったおちんぽ皮の中に、何か隠してるかもしれません♥」

「そんなわけっ……うああ！」

「んちゅ♥ れろおおお♥」

アズキが肉先をべろりと舐めれば、男はもう喋ってなどいられない。

アズキはもはやアイドルでも一日署長でもなく、肉欲の赴くままペニスを求める淫乱なメスと化していた。



アズキは男のちんぽを指でピンッと弾いてから、回れ右をした。壁に手を突いて、むっちむちのデカケツをずいっと突き出す。

男は、面食らって息を呑んだ。

アズキは見せつけるように黒ストッキングを破いて、股間を晒す。その途端に芳醇なメスのフェロモンが「むわあああああッ」と立ち込めた。

「じゃあ、これが最後の確認です♥」

妖しい微笑を讀えて、流し目を背後に送る。

「今、あなたの目の前にはちょうどハメ頃のぬるぬるおまんこがあります♥

この穴におちんぼ突っ込んでずこばこ腰を振ったらとつてもとつても気持ちいいでしょうけどお……あなたは、痴漢さんじゃないですから耐えられますよね♥」

「うっ……くううっ……!」

男は目を血走らせながら奥歯を噛み締めた。

彼の顔には「このエロメスを今すぐぶち犯したい」とはっきり書いてある。アズキは桃のような巨尻をふりふりと振りながら、

「あっ、どうしたんですか……おちんちん、少しずつつ近づいちゃってますよ♥

このままじゃアズキの無抵抗まんこににゅるんって入っちゃいます♥

やだやだ、怖い、このままじゃレイプされちゃう……でもアズキはお巡りさんだから、最後まで続けないと♥ お兄さん……アズキ、信じてますからね♥」

「はあ、はあ、はあ……ッ!」

男はケダモノのように息を荒げながらアズキの尻を掴んだ。

「ぬちっ♥」と、アズキの入口に熱々の龟头が触れる。

「あんっ♥ いけませんお兄さん♥ 警察官を強姦するなんて重罪ですよ♥」

「っるっせんだよ、このドスケベボリスが!」

「ンおとおおお お お おお——ッ♥♥」



男はひと思いに腰を突き出し、アズキの膣穴を串刺しにした。
間髪入れずにピストンを開始して何度もポルチオをぶっ叩く。

「んひっ♥ しよんな♥ お兄さん酷いですう♥ アズキ、お兄さんの言葉を信じてたのに♥ その気持ちを裏切って、おちんぼ挿れちゃうなんてえ♥ こんなところ誰かに見られたら、言い逃れできませんよ……い、今なら許してあげますから、おちんちん抜いてくだしゃい♥」

「誰が抜くかつ……こんなに奥まで濡らして、本気交尾期待してたくせに、白々しいこと言ってんじゃねえ！ おら！ おらおら！」

「あひいいイイン♥ さ、刺さ、りゅうううう……♥ ろくにチンカス掃除もしてない汚いおちんぼがアズキの子宮口をごつごつしてやるよおお♥ あんっらめえっ♥ 犯罪者のちんぼなんかに負けたらいけないのにいい♥」
「へっ！ 自分からへこへこ腰振ってるくせによく言うぜ！ どうせあんた、このドスケベボディを悪用して何人もの男を冤罪にかけてきたんだろ！ 彼らの無念を乗せて、たっぷりお仕置きしてやるよ！」

「ンほっ♥ おお おっ♥ おっおンっ♥ おっおっお おっ♥」
「くうう……可愛い顔してきったねえオホ声出しやがって、ちんぼがイラつくんだよっ」

男はアズキの胸元に手を伸ばすと、警察官の制服を乱暴に引き千切った。
「ぶるんっ♥」と飛び出してきた巨大な乳房を鷲掴みにして、その柔肉を手の平全体で堪能しながらノンストップの抽挿を繰り返す。欲求不満だったアズキのおまんこはこの時点で三回もイっており、足元はもう雨が降った後のようになっている。

「おい、こっち向け」
「ひゃ、ひゃい……んんんっちゅう♥」

振り向いた途端に唇を奪われた。

男は既に理性を跡形もなく失っており、アズキという極上のメスを全身で味わうことしか考えられない。激しい腰つきで愛液の飛沫が撒き散り、アズキは膝をかくかく震わせながらも貪欲にちんぼを求め続けた。

男はアズキの尻を引っ叩きながら、

「オラオラどうしたあ？ レイプちゃんぽには負けないんだろお？」

「そ、そうでしゅ♥ アズキは♥ 警察官だから♥ あなたみたいな、卑劣な痴漢に犯されたって、全然気持ちよくなんか…… おっ♥ やっべいぐっ♥ 激おこちんぽにガン突きされて子宮が降伏しちゃってる♥」

鈴口から二、三回ザーメンが先走った後、怒涛のような奔流がアズキのおまんこを襲った。

子宮口にぴったり亀頭を押しつけたまま、妊娠確実の特濃精液をびゅるびゅると吐き出し、その勢いは三十秒以上に渡って延々と続いた。結合部から幾筋もの白濁が垂れ落ち、アズキの黒ストの色を変えていく。

「あつ、へえええええ……♡　ち、痴漢ちんぽに♡　本気種付けされひゃつたあああ♡」

「ああ、くそ……出る！　止まらねえ！　警察の女に、中出しレイプしちまつた……げ、現行犯……俺の人生、終わった……くそ、くそ！　お前の、お前の人生も終わらせてやる！　孕め孕め孕めえええ！」

「ンほおおっ♡　も、もうお精子入らにやいれすううう♡」

アズキは壁に押しつけられ、無様に舌を垂らしながら久しぶりのガチアクメに酔いしれた。めっちゃくちや気持ちよかった。嬉ションまで出た。

膣内射精から間もなく、男は次第に青褪めていった。賢者タイムになり、自分が何をしでかしたのか冷静に理解したのだろう。

「うわ、わわわ」

男はちんぽを仕舞う暇も惜しんで逃げ出そうとした。その腕を、アズキが引き止めた。

「どこに行くんですか……♡」

男に抱きつき、熱烈な口づけで男を戸惑わせる。

股に挟んだ勃起ちんぽを扱きながら、囁き声で耳朵を打つ。

「次は、アズキが懲らしめる番ですよ♡」











